

---

# ラブカクテルス その21

風雷人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラブカクテルス その21

### 【Zコード】

Z9955C

### 【作者名】

風雷人

### 【あらすじ】

今宵は夜空を気持ちよく飛べるようなカクテルをご用意しています。ご賞味あれ。

いらっしゃいます。  
どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか?  
甘い香りのバイオレットフイズ?  
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ?  
はたまた、大人の香りのマティニー?

わかりました。本日のスペシャルですね。  
少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は背中の羽根でござります。

じゅつくづくづく。

私はこの頃夢を見る。背中に羽根が生えて、自由に空を飛び回れる夢だ。その夢ときたら、風は冷たくて清々しいし、眼下の景色は夜の真っ暗な中に、街の灯りがあちこち照らし出されて綺麗だ。  
それが妙にリアルなのである。

普段の私はハタチの普通の女の子。  
就職はしていないが、フリーターだ。  
二ートではない。

仕事はファーストフードのフロント。  
それなりの忙しさと、責任感はある。  
何もしていないと暇だし、これくらいのリズムがある方が気軽な生活には丁度いい。お金はあまり多くは持ってはいないが、欲しい物

がこれといつてあるわけではなかつた。  
それに、ハマつているものもなければ、追いかけいるものも今はな  
い。

かと言つて、何のために生きているのかとか、何をすべきなのかと  
か、自分を探して悩んだりもしていない。  
楽しいか、楽しくないかとかも考えていない。  
だた流れているだけだ。

熱くなるのも面倒くさいし、想い更けるのも疲れる。  
そういう訳で、周りからは冷めてるなんて言われたりした。あまり、  
気にしていないが。

そんなある日、またあの夢を見た。

その時の私は、いつもは自分では出さない感情を表にだしながら空  
を飛んでいた。

フリーターで、なんとなく流れて生きている私とは違つて。

いつもは空を飛んでいるといひで終わる夢は今回は様子が違つてい  
た。

私は街の上の空を抜け、ある山の上空に来ると、三回気持ち良く旋  
回して、ポツンと一つだけある、なんだか古ぼけた家に降り立つた  
のだった。

私は薦が付いた扉を開けて中に入つた。

そこにはとても氣味の悪い中年の魔女みたいな女性がいた。

夢の中の私は、彼女とやけに親し気に話しかけている。

そして、その私は魔女のような女性に何かが入つたコップを差し出  
され、その中身を飲みだした。すると一人の会話は、私の耳にハッ  
キリと聞こえてきた。

その女性は夢の私に言つていた。

そろそろ効くはずじや。

そこで私は目が覚めた。

そして私は背中に違和感があることに気が付き起き上がった。  
後ろを振り返つてしばらく固まつた。

なんで背中に羽根が？

分かつた。まだ夢の中か。

私はそれならと羽根を動かしてみると動いた。  
やつぱり。

私は立ち上がり、鏡で背中を見た。

寝るときに着ていたネマキが羽根が生えてきたせいで破けていた。  
お気に入りのパジャマだったのに。

まあいい。夢の中だ。しかし、羽根は邪魔だった。

とりあえず、夢の中でも起きたからには伸びをした。  
体から足の先と腕の先に力が送られる。

すると羽根にも力が入つてしまつて、羽根は思いつきり広がつた。  
その大きさは六畳の部屋の短壁方向より広がりをみせ、そのおかげ  
で飾つていたパズルで出来た絵は額ごと落ちてガラスは割れるし、  
苦労して作ったパズルはめちゃめちゃになつた。

それが落ちた巻き添えで、引き出し棚の上に飾つていたクマやウサ  
ギやネズミのぬいぐるみたちも、落ちて散乱。

寝るときに飲んだお茶もグラスごと弾け飛んで、床のジュウタンは  
びしょびしょ。

向かいの壁の壁掛け時計も落下して転げ落ち、その横に掛けていた  
カレンダーまでもがバサバサと音を立てて、散らかったものの仲間  
入りを果たした。

私はヤバいと、力を一気に抜いたが、このままだった。

そこから動くのも気が退けるくらいの足元に、頭をガクリと折り曲  
げた。

私はでもまた気が付いた。

そういうえばこれは夢だつた。そうだ。今は居心地が悪いが、片付け  
なくてもいいんだ。

私は一瞬で、もたげた頭を起こした。  
しかし面倒くさい夢だ。私は思った。

なかなか覚めない夢に、私はイラつきを覚えたが、考えてみれば今  
の私は飛べるのだ。

私はベランダに出て天気の良い空を見上げて、その気持ちいい空気  
を胸いっぱいに吸い込んだ。いい朝だ。

羽根は心と連動しているみたいに優しくゆづくら広がった。  
しかしその途端、私はビクッとして周りを見ながら羽根をつぼめた。

とつあえず、周りの片付けをやつたほうがいいと思い、私はベラン  
ダの物干し竿と洗濯バサミを片し始めたが、落ちたひとつを拾いに  
しゃがんだ瞬間、後ろにあつた何も植えてない土だけ入った鉢に羽  
根が当たったようで、ガシャンといい音がした。

しかし、邪魔な羽根だ。

私は後ろを見るのをやめた。

周りがすつきりしたところで、私はゆっくり羽根を広げてみた。と  
りあえず当たるものはない。

いよいよいつてみるか。私は思った。しかし上には屋根がある。ど  
う飛ぶか？

手っ取り早そうなのは、下に飛び降りて下に付く前に羽根を羽ばた  
かせて浮くやり方だつたが

、さすがに飛び降りるのは危険そうだし、確かに夢の中だから死ぬ  
ことはないけど、恐いのはごめんだ。

しかし、いつもはどうやって飛んでいたのだろう。ため息が出る。  
試しに手すりに腰掛けてみた。恐いから背中を外に向けて部屋の方  
を見ながらそつと。

バランスをとりながら、ゆっくり羽根を動かしてみると手足よつは  
ぎこちないが、思ったようには動いているようだった。

私は羽根を少しづつ早めて羽ばたかせ、体がだんだん持ち上がり始めたのを憶え、ちょっと焦つて羽根を止めた。

これでいいのだろうか？

恐る恐るまた羽根を羽ばたかせて緊張しながら再びゆっくり早めていつてみた。

また体が浮いてきたが、手摺を握った手はなかなか力を抜けない。その時、体がバランスを崩し後ろにつんのめった。

やばいっ。手は意識とは別に離れて体は浮いた。

目をつぶつたまんまるべく背中の羽根に気を集中した。体は緊張したまま硬くなっていたが、羽根は休まずに動いていた。と言つくり動かさせていた。

まるで背中を摘まれているように体は持ち上げられて、そつと田を開けると、自分の家のベランダは、かなり小さくなつて足元にひょこつと見えた。

私は少し腹を下から持ち上げられたような、不安な感覚を覚えたが、不思議と怖くはなかつた。

町並みはやがてかなりの広がりを見せて、人や車が米粒くらいになつた。

きっと東京タワーくらいの高さだろうか。

しかし、意外と気持ちいいものだつたが、羽根の着け根の筋肉はだんだんキックなつてきていた。私はそろそろ体を持ち上げ横に行こうと思ったが、それはなかなか難しかつた。

よく、マンガや映画で見るイメージでは、羽根が生えた天使のような人は、体を一文字と言つたが、体も足も伸ばして気持ち良さそうに飛んでいるし、しかも優雅だ。

私もそれが簡単に出来ると思つていたが、なかなか難しかつた。きっと腹筋がないせいだろう。

足を上げようとしても結局上がっている場所は背中で、他の場所は重力の手に掴まれて、身動きが出来ないのだった。

いつまで経つても変わらない姿勢が、あまりに惨めで私は諦めて降

りることにした。

しかし、羽根がある人はそんなにマッヂョな天使なんて想像を裏切るはずだ、なんてぶつぶつ言いながら私は下へゆっくり降りたのだった。

ベランダにそのまま降りるには、少し技術がいりそうなので、私は足をバタバタしながら、なんとか場所をずらしてみることを試みた。

そしてようやく脇の道に降り立つたとき、後ろから悲鳴が聞こえてきた。

後ろを振り返つてみると、初老の男性が気絶して倒れていた。

私はびっくりして急いで自分の家に飛び込んだ。

部屋に戻るときに母親とすれ違つた。

母はびっくりした顔をしたが、

何の真似？早く脱ぎなさい。その変てこなの。と、あっさり行つてしまつた。

私はリアル過ぎる夢に疑問を覚えて、首を傾げながら氣のない返事をして、一階の自分の部屋に戻つて行つた。

部屋の扉を閉めて、少しの間、その扉を背中にして、混乱している自分に冷静になるように言い聞かせながら部屋の中をゆっくり見渡した。

昨日の夜に飲んだ、眠り前のハーブティー。さつきのまま床に倒れている。そしてそのまま何もなかつたかのように転がつていて、それだけではなく床はハチャメチャなままだ。テレビを慌てて付けてみる。リアルすぎる。

朝のいつもの番組。どこに変えても見覚えがあるものばかり。

しかも携帯を覗いてみると、昨日電話したアルバイト先などの履歴。

でも背中には羽根。

本当に悪い夢だった。

まさか現実の訳が。

私は古典的に頬を思いつきりツネつてみた。

凄く、声が出るほど痛かった。

気の動転と情けなさで涙が出てきた。

すると、背中が軽くなつた気がした。

まさかと思って手で背中を触つてみると羽根はなくなつていた。

私はホッとした。

なんだつたんだろう。私は砕けた腰を立たせることができなかつた。

その日は部屋から一步も外に出なかつた。

またいつ背中に羽根が生えたらと、考えたら全然落ち着かなかつたからだつた。

しかし、今になつても理解出来ない。何だと言つのだつう。

私は布団の中に潜りながら、そのことがグルグル頭をかきまわして具合が悪かつた。

そして、そのうち私は、また寝てしまつたのだつた。

私は寝ていたはずなのに、いつの間にか起きていた。しかも羽根が戻つている。

私はガックリ肩を落とした。

トボトボとしばらく歩くと、見覚えのある古ぼけた家が見えてきた。夢で見たあの家だつた。私は吸い寄せられるようにその家の玄関に行くと、薦の巻いたあの扉があつた。

あの時の夢の中と同じだつた。

私はためらわずにその扉を開けた。

するとそこにはあの、気味の悪い中年の女性がいた。

私が驚いて見ていると、その女性は、

ぼーっとつ立つてないで椅子にでも掛など、無愛想に言つた。

私は小さく返事をして椅子に腰掛けてみたが、羽根が邪魔で落ち着かなかつた。この姿で椅子に掛けるなら背もたれ無しのものがいい

と思うのだった。

しかし、ここにある椅子は皆、大きな背もたれが付いたものばかりだった。その割に座るところが小さく、本当に心地が悪かった。私はでも、試しに寄りかかってみた。夢の中みたいだし、もしかしたらと思つたからだ。

しかし、やっぱり羽根は私に痛みを訴えた。

まったく厄介だ。

そんな事をモジモジしていると、氣味の悪い女性が声を掛けてきた。まだ馴染んではないようだけど直に飛べるようになるさ。安心しな。私の魔法は誰よりも完璧だからね。まあ、少し努力は必要だらうけど。

お前さんは細過ぎるからね。

そう言って、私にこれでも飲めと、何かの液体が入つてているコップをくれた。

毒どくしいその緑色の液体は、見た目と違い、いい香りがした。一口すすつてみると、今まで口にしたことがない味わいが広がった途端、何が浮いてきた。

私はそれを見て気絶した。

それがムカデだったからだった。

私がまた目覚めても、そこにはやっぱり羽根があった。

少し動かしてみた。 やっぱり動くのだった。

私は少しガツカリしながら考えた。

眠れば寝たでそこには羽根がある。

起きれば起きたで羽根がある。とりあえず羽根があるのだ。

しかし、泣けば消えるのだろうか？この間はそうだった。

試しに泣いてみたかつたが、しかし、そんな簡単に泣けなかつたし、嘔泣きしても羽根はなくならなかつた。ため息が出た。

しかし、邪魔だ。

なんといっても、羽根があると仰向けにはなれないし、アグラをか

いてもオシリよりも羽根の方が長くて腰が落ち着けなかつた。

何とかクツショソの上に正座してやつと落ち着く始末だ。

私はとりあえず、その格好で部屋にあるチヨコレートを食べるべくいしかやることがなかつた。

しかしそんな姿勢が長く続く訳もなく、私の足は悲鳴を上げた。  
しばらくジーンと足が感動しているようだつた。

私は何をやつてているのだろうか。

ヨロヨロ歩きながら、壁を這つて足の回復を待つと、私はとりあえず羽根があるのだし、まともに飛んでみたいと思い立つたのだつた。手始めに、私は筋トレをしてみた。

見よう見まねで腕立て伏せをやつてみたが、十回が限界。

しかも腹筋は羽根が邪魔で出来ない。

それならばと、以前、ダイエットのために買つて、ベッドの下にしまつていた、腹筋を揺らす器具を持ち出した。

これなら立つていても大丈夫。こんなことで役に立つなんて。ん?  
果たして役に立つのだろうか。

半真半疑で腰に巻いてみたのだった。

そのうち外は夜になつた。

母親が部屋に上がつて来ないよつに、わざわざ携帯で家に電話し、微妙な居留守をしていたので、電気は付けられないし、足も忍び足。しかもテレビもイヤホンと、まったく不便だつた。

腹は減つてはいなかつた。部屋にある菓子を食べ尽くしたからだ。太つたらどうしようつと思つたが、腹筋鍛え器をやりながらなら大丈夫だと言い聞かせ、食べたのだった。

お気に入りの菓子を震えた腹で吃るのは、何か虚しかつたが、そんなことはいつてられなかつた。

私は親に見つからないように、皆が寝静まつた頃を見計らつて、外出した。

空にはいい月が出ていた。

私は周囲を見渡し、誰もいない事を確認して羽根を羽ばたかせた。体はやはり、摘まれた様に持ち上がつたが、私はすかさず、背筋をピンと張つて上を見た。

今朝より上手く飛べているように思えた。

ある程度までの高度に行き着くと私は思い切つて、水の中へ飛び込むように、両手を前に伸ばして、頭を出来るだけ上げて体を横にしてみた。

体が水平になる位だと、やはりオシリから後ろは下がつたまんまだつたが、もう少し手を下へ向けると、オシリは浮き出した。しかしその途端、私は真っ逆さまになつて下へ墮ちて行つた。

私は声を挙げた。そして次の瞬間、体が回り背中が下になると、羽根は重力に掴まれて動かせなくなつた。

もう駄目だ。

そう思つた時、私はフツと浮いた。体が何かに支えられた気がして、瞑つていた目を開けると、そこには私を抱きかかえる男性がいた。なんだか私は安心して氣を失つてしまつた。

目が覚めたら今度はあの氣味の悪い女性の前にいた。起き上がつてみると、羽根がなかつた。

背中を探つていると、その女性は私にまたコップを渡してきた。

私がそれを不審な目で見ていると、ただのキノコスープだと言つた。

私は恐る恐るコップを受け取つた。

そして、誰かが他にもいる気配がして振り返つてみると、そこには

私によく似た、同じ歳くらいの女の子が座つていた。

そしてその子の背中には羽根が生えていた。

彼女は私を見るなり、微笑みながらお礼を言つてきた。

私は何だかわからず、握手を求める手を握った。

彼女は私に話してくれた。

なんでも、彼女の許嫁が今、死神の仕事をしていてここ何百年も会いに帰つて来なかつたので、人の夢を借りて人間世界を探していたところ、私の夢に来た時にその彼を見つけたらしいのだ。

それで、私の体に魔女の薬を使って入り込んだ。

そして私がさつき落ちたときに救つてくれたのが彼で、氣を失つているときに私の心から出てきて、彼との再会を果たしたそうだ。しかし、死神に救われるなんて何とも複雑な話だ。

彼女はできればこの先も度々体を貸して欲しいと言つてきた。私の体は格好も姿も似てるので合わせやすいのだそうだ。

まるで服みたいだと私は思い、いい気分ではなかつた。

しかし、私も条件を付けてみることにした。

まずは、普段は羽根が無くせるようにして欲しい事。

すると、彼女はクスクス笑い、

あなたが向こうの世界で要らないと思えば、羽根は消えるのだと言つた。

その他に、思う様に私も翔びたいと言つと、彼女は言つた。

体を動かすよりも力を抜いて自然な状態で強く念じることだと。心で羽根を動かすのが翔ぶには大切なだと教えてくれた。

そして、またクスクス笑つて、筋トレは必要ないと言つたので、私は顔を赤くしたが、私も一緒に笑つてしまつた。

そして、私は目が覚めた。うつ伏せに寝ていた背中には羽根があつた。

消えて。と、心で思うと羽根はなくなつた。

彼女の言つた通りだ。

体を起こそうとすると、腹が痛かつた。

ヤバい。筋肉痛だ。

私は動くのを止めた。

そして考えた。

晴て私は翔べるのだ。何をしよう。

しかし、一番気になるのは、あの死神だった。  
なにしろ彼はイケメンだったからである。

その夜、私は月に向かって羽ばたいたのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのじに来店、心よりお待ち申し上げております。では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9955c/>

---

ラブカクテルス その21

2011年1月16日01時55分発行